

### 3. 学生・卒業生からの報告

#### (1) 教育実習報告

##### 幼稚園実習を終えて

金山 あゆみ（女子短期大学部）

私は今回の実習に臨むに当たって、一年次の実習の反省を踏まえ、子どもたちへの言葉掛けの仕方を学ぶことを目標としました。しかし、5歳児クラスでの責任実習の中で、製作の手順を説明する際に、うまく伝えられずに子どもたちが戸惑ってしまうことがありました。その後、保育者が別の言葉で伝えると、子どもたちは納得し、製作に取り組み始めました。その様子から、言葉掛けの際のタイミングや言葉選び、伝える順序などで子どもたちの理解度が大きく異なることがわかりました。そのため、いつ、何を、どのように、伝えるのが最もわかりやすいのかを考えられるように心掛けたいと思いました。また、効果的な言葉掛けは一人ひとり異なることも学びました。子どもたちと丁寧に関わり、理解することで一人ひとりに合った言葉掛けができるように努力したいです。

また、今回の実習では、読み聞かせをする時間を多く頂きました。最初は緊張や読み聞かせに対する苦手意識から、ただ読むだけで精一杯になっていました。しかし、回数を重ねるうちに緊張は薄れていき、子どもたちの表情や吹きなどに気を配りながら、私自身も予想していなかった子どもたちの新鮮な反応を楽しみながら読み聞かせができるようになりました。就職後も、子どもたちと楽しめるようにたくさん読み聞かせをしたいと強く思いました。

今回の実習で、子どもたちと関わったり、責任実習を行ったりして、言葉掛けの難しさや大切さを痛感しました。場所や状況に応じて、子どもたちに適切な言葉掛けができるよう、より学びを深めていきたいです。また、様々な保育者の保育を見させていただくことで、保育者によって子どもたちとの関わり方や言葉掛けなどの保育方法が異なり、それにに応じて子どもたちの反応も異なることに気づきました。私も自分だけの保育の形を見つけて子どもたちが楽しめるような保育を展開したいです。

##### 保育所実習を終えて

佐藤 彩香（女子短期大学部）

保育実習では0～5歳と幅広い年齢層の子ども達と触れ合い、学ぶことができると感じ、乳児の発達理解を深めることを目標や課題として設定した。

私は、はじめに0歳児のクラスから入らせていただき、実習を重ねていく毎に少しずつクラスの年齢が上がった。0歳児クラスは、人見知りの激しい子が多かった為、私が部屋に入った瞬間に泣き出す子、周りで泣いている子を見てつられて泣く子がいた。人見知りも発達段階の1つであるので、気にしないようにはしていたものの、自由遊びの時に、「怖がらせないように」といった気持ちが表にでてしまい、積極的に声をかけられず、反省点の1つ

となった。これは、実習1日目の出来事であったが、2日目以降から身近にあるものを自ら手に取り、自然と子ども達の遊びになじめるような工夫をした。それでもやはり泣かれてしまうこともあったが、前向きな気持ちで子ども達に触れ合うことができた事は、自分自身の成長を感じた瞬間だった。

日頃から子ども達を養育している先生方は、朝、お母さんと離れてぐずっている子に対して「お母さん、ちゃんとお迎え来るから大丈夫だよ」「お友達が〇〇ちゃん来るの待ってたよ」など、0歳児にも安心が感じられるような声かけを続け、時にはやおもちゃを使って興味を引くといった言動を自然に取っていた。泣いている子への声かけは、私自身きちんと身につけられなかった知識・技術であり、保育者の方々の「大丈夫だよ」といった声かけやおもちゃを使用した遊び方、使用しない遊び方を同じように真似て行うことが望ましかったのではないかと感じた。

保育実習では、今後の課題として、乳児への寄り添い方を身につけることを見出した。保育者は、保護者の代わりとなる存在であり、子ども達にとって第二の母のような存在であると現場での活動を通して感じたので、子ども達に安心してもらえる寄り添い方を現場で深めていきたい。

## 施設実習を終えて

安藤 久美子（女子短期大学部）

施設実習を終えて、11日間という短い期間の中で、利用者の方といかに関わっていくか模索する毎日でしたが、職員の方々の親身なアドバイスや利用者の方々の温かさの中、自分なりの関わり方を発見し、コミュニケーションを積極的に取り、心を通い合える喜びを体験しました。障害者通所施設の内、日中一時支援(学童)、生活介護、就学継続支援事業、地域活動支援の各プログラム内容、生活の流れ、職員の利用者との関わり方を学び、また、利用者との関わり方や距離の取り方、コミュニケーションを取るなど、日々の目標設定を立て、利用者の言動や行動、求めていることに目を向け気持ちを知る事に努めました。

今までの障害者に対して抱いていた思いや視点が大きく変わりました。保育実践と同様に障害があっても、一人一人利用者の発達や特性、性格には違いがあり、職員は、障害の種類ではなく、それぞれに合わせた対応をしていて健常者も障害者も利用者や子どもを理解する姿勢は、変わらない事を理解しました。職員は、自立を促したり、自己決定させたり、自分の力で考えて行動できるような支援もしており、保育と共通する点が沢山ある事を理解しました。

実践的には、遠城寺式発達検査を経験させて頂き、また精神疾患を伴う方の相談支援の立ち合い、個別指導計画書を見せて頂く機会があり、学校で学んだ実際を見ることができました。実践から、難しさを痛感し、自分には知識の習得と実践力を高める必要があると考えました。施設、保育も共通する点であり、利用者のストレングスを見極め、最も良い事は何

か、どのような支援ができるかを探究し、学び続ける姿勢、職業倫理を持って、保育者としての専門性を高めていきたいと思えます。

## 小学校教育実習について

河原 椿（人間文化学部人間文化学科発達教育専攻）

私は、10月1日からの4週間、母校である益子町立七井小学校に教育実習に行ってきました。全校児童数が約360人、七井の中心地にある小学校です。配属となったクラスは5年1組で29名が在籍する、個性豊かな子どもたちがたくさん存在している学級でした。私が行った授業時数は研究授業を含め9時間、授業見学は全教科を見させていただき、教職員の皆様のご支援で、とても充実した毎日を送ることができました。

一日の流れは、朝7時15分から30分の間に出勤し、職員室に行き、職員の方々に挨拶をすることから始まりました。出席簿に印鑑を押すことや授業の準備をし、担当のクラスには、7時45分までには行くようにして、子どもたちとコミュニケーションを取ることや宿題の丸付けの補助を行っていました。授業が始まると、私自身は授業参観や講話を聞くこと、教材研究、実際に授業をすることを主に行っていました。子どもたちの下校後は日誌を付けること、指導教員の先生との授業などについての話し合い授業の準備などをし、遅くとも21時には帰宅しました。

実習中、私が目標とし心がけていたことは、子どもたちとたくさんコミュニケーションを取ることです。一人一人の個性を理解し、その子に合った話し方や言葉を選ぶことなどに配慮し、様々なコミュニケーションの形を学びたいと思えました。また、子どもたちと早く打ち解け信頼を築きたいという思いもありました。子どもたちは本当に十人十色です。間違っただけの対応をするだけで、トラブルになってしまいます。私自身、子どもとのやり取りの中で誤解を招き、信頼を失う危機がありました。子どもとはいえ、まずは一人の人間として尊重して対応していくことの大切さを知りました。

小学校の教育実習は私にとって、大学生活の中で一番大変で一番成長出来た経験だと思っています。どんなことにも、一生懸命に取り組むことの重要性を再確認し、支えてくださった周りの方々に感謝することが出来た期間でした。誰にでも出来る訳ではない、この貴重な経験を忘れずに、これからの自分の進路に生かしていきたいと思えます。

## 中学校（国語）教育実習を振り返って

有田 貴浩（人間文化学部人間文化学科心理コミュニケーション専攻）

私は、3週間の教育実習の中で、たくさんの経験や発見をすることができました。

1つ目は、授業展開の大切さです。教育実習での最初の授業は、どこか淡々と進めていくだけの授業で、生徒もただついてくるだけのように感じてしまいました。指導案の授業展開通りには進んだのですが、納得のいく授業には程遠いものでした。その後の授業でも、生徒

がつまらなさそうにしていた時がありました。その時何気なく「ポケモン」を例に出して説明をしたら、ほとんどの生徒が興味を示し、授業に積極的に参加してくれるようになりました。指導案にはなかった事でしたが、生徒も自分自身も楽しみながら授業を行うことができました。この出来事が、生徒が楽しみながら受けられる授業作り、生徒が分かりやすい授業展開を作成することの大切さを実感するきっかけになりました。

2つ目は、生徒と関わることの大切さです。学校では生徒と関わる機会が数多くあります。授業中や部活動はもちろん、登下校時のあいさつ、昼休み、移動中の廊下でも、生徒と会話のできる貴重な場になります。私の実習先では、毎日生徒に日記(4~5行程度)を書いてもらっていました。様々な状況下で生徒と関わる中で私は、生徒の多面性に気が付きました。授業中おとなしい生徒が、部活中に大声をだしチームを引っ張っている姿を見たり、授業以外でなかなか見かけない生徒が他のクラスで友達と楽しく話していたりしていました。私は、授業以外でも、出来るだけたくさんの中で生徒と関わりを持つように心がけました。そうすることで、生徒と距離を縮めることができるのはもちろんですが、生徒の実態を知ることにもつながると思います。授業の指導案作成にも、生徒の実態は欠かせないものです。生徒の実態把握、授業作成の手助け、そして、生徒との信頼関係を築くためにも、生徒と関わることはとても大切なものであると思いました。

3週間の実習を終えて、自分の課題をたくさん見つけることができました。今後、それらの課題の解決に励み、また教壇の上で生徒たちとたくさんの思い出を作っていきたいと思えます。

## 高等学校（英語）教育実習について

阿嶋 優太郎（人間文化学部人間文化学科心理コミュニケーション専攻）

高校の英語の教師を目指してこの大学に入学した私は、平成30年5月28日から6月8日までの2週間、母校である栃木県立益子芳星高等学校で教育実習を行いました。2週間という時間はあっという間でしたが、その中ではさまざまな発見がありました。

1つ目は、生徒とのかかわりについてです。実習を始めたばかりのころは緊張していたせいか、40人近くの生徒たちの前でうまく話せるのか、とても不安でした。ところが、いざ生徒たちを目の前にして声をかけてみると、皆笑顔で応えてくれました。そして、声をかけた内容以上にいろいろなことを話してくれました。今思えば、お互いに緊張していたのかもしれない。授業の場面でも同じで、発問や机間巡視を通して対話を続けていくと、次第に笑顔を見せいろいろな考えを聞かせてくれました。他には休み時間や放課後、清掃の時間、球技大会といった様々な場面での、生徒との会話や相談事など思い出は尽きません。こうした生徒との関わりから、あらためて、いま目の前にいる生徒を理解しようとしてしっかり向き合うことの大切さを学びました。

2つ目は、授業についてです。実際に教壇に立って授業をしてみると、大勢の生徒を前に

授業をすることは想像していたよりもはるかに難しく、また机間巡視のときも教室全体に目を配りながら行わなければならないため、研究授業にいたるまでなかなか上達がみられず苦勞しました。教科書の単元の内容をうまく噛み砕くことが出来ないまま授業に臨んでしまったこと、丁寧に授業をやろうとするあまりテンポやメリハリがつけられなかったこと、板書や説明をするときにポイントを絞ることが出来ないまま行なってしまったことなどが原因でした。またある授業実習では、構文のポイントや文法の説明をし忘れてしまったことがあり、途中で文構造などについての丁寧な説明を加えましたが、それがかえって生徒たちの混乱を招いてしまい、生徒たちの理解度をうかがうことができないまま授業を終えてしまうことがありました。単元の内容を正確に把握し、実際の授業の手順を何度もイメージしたうえで、ポイントを絞ってわかりやすい授業ができれば、もっと生徒たちの理解力や思考力を引き出したのではないかと反省しました。実習期間中には、英語だけでなく国語や数学など、他教科の授業もたくさん見学させていただきました。それらの授業では、生徒たちに何を考えさせ、何を理解させ、どのような力を身につけてほしいのか。また、それにはどのような説明や発問・手順が適切なのかと、生徒の実態にあわせて授業が展開されていました。こうした先生方の授業観察で学んださまざまなことも、綿密な教材研究と準備、冷静さ、そして十分なイメージが出来ていなければ発揮することが出来ないのだと身にしみて感じました。

3つ目は、現場の先生方の多忙さについてです。私は実習生だったために教材研究や授業観察、授業実習などが主でしたが、英単語テストの採点や英検の試験監督もさせていただきました。しかしそれ以上に、現場の先生方はホームルーム管理や事務処理、授業準備、生徒の把握、その他学校行事や委員会、部活動の指導に追われ、教材研究の時間すら確保できないような有様でした。自分自身が高校生だったときには全く想像もしていなかったことでした。こうした多忙な現状にもかかわらず、教育実習生を受け入れてくださったこと、実習中に先生方からいただいたたくさんのご指導やお言葉を忘れず、今後も精進していきたいと思えます。

いつかまた、あの教壇に戻ってきたいと思えます。辛いこともありましたが、先生方や生徒たちの笑顔であふれた、素晴らしい2週間でした。

## 高等学校教育実習（商業）を終えて

谷口 真也（経営学部経営学科）

私は、5月14日から25日までの2週間、母校の茨城県立鬼怒商業高等学校で教育実習を行いました。科目は商業で、1年生の簿記の授業を担当しました。最初の1週間は、主に先生方の授業見学と講話を受けながら、次週にある自分の授業のための準備をしていました。母校で教育実習をするにあたり、懐かしさと安心感もあったのですが、むしろ緊張感の方が多かったと思えます。生徒としてではなく教育実習生として生活するのは立ち振る舞

いも違いますし、何より生徒にとっては自分も先生なのですから、しっかりとした自覚が必要です。実習1日目は、本当に緊張していました。しかし、私の担当したクラスの生徒たちは私を受け入れてくれ、先生方もやさしくサポートしてくださったので、日を重ねるごとに徐々に慣れていきました。

教育実習で一番大変だったのが、授業の準備でした。授業の準備に取り組めるのはいつも毎日の部活動が終わってからで、そこで教材研究を行い、指導担当の先生に指導案を見ていただき、実際に模擬授業を行ったりしました。遅い日は、学校に深夜まで先生方と残り、授業の準備を行いました。今思うと、ご自分の仕事もあるのに私の面倒も見てくださった先生方には、本当に感謝しかありません。しかし、これだけ準備をしても実際に授業では、上手くいかないのがほとんどでした。授業は9回やらせていただいたのですが、テンポよく、時間内にまとめまで終わることが出来たのは1回だけでした。生徒に発問してもうまく回答してくれなかったり、説明が長くなりすぎたりなど、実際に行ってみると練習と違う結果になることがほとんどでした。しかし失敗したからこそ、先生方から多くのアドバイスを頂くことができたので、自分の高めるためのよい経験となりました。どうすれば上手くいくか、生徒に分かりやすく説明できるか、などと考えながら授業を作るのはとても楽しかったです。

教育実習では、部活動にも参加しました。自分がかつて所属していた硬式テニス部を見ることになりとても嬉しかったですし、参加することで本当に楽しかったです。教育実習中は、この時間が一番ほっとする時間でもありました。実習1週目に県予選会があったので、生徒の練習にも力を入れました。県大会出場が決まった時には、飛び上るほど嬉しかったです。県大会の日程は実習が終わった後でしたが、会場まで応援にも行きました。自分が高校生だったときに顧問の先生もこんな気持ちだったのかなと思うと、とても不思議な気持ちになりました。

2週間の教育実習を終えて、教師の良いところも悪いところも、どちらの面にも触れることが出来たと思いました。教師の仕事はブラックだと言われますが、それを超えるほどの充実感や楽しみがあると思います。私は本当に教育実習に行くことが出来てよかったと思いましたし、人の為に働くことがこんなに楽しいことなのだと改めて認識することが出来ました。私は卒業し、教職に身を置きますが、いつまでもこの教育実習のことを忘れずに生活したいと思います。

## 特別支援学校教育実習について

近澤 あかり（人間文化学部人間文化学科発達教育専攻）

益子特別支援学校の小学部で教育実習をさせていただきました。2週間の実習を通して多くの学びを得ることができたと感じています。教育実習をする前は小学校の教育実習と同様に不安でいっぱいでした。子ども達とかかわれるのか、しっかりと授業ができるのかなど

不安がありました。しかし、児童と積極的にかかわることと授業をする際に何を伝えたいのを明確にして授業を行うという以上の2つのことを意識して2週間の教育実習に臨みました。

児童とのかかわりの点では、かかわっていくうちにあらゆる場面でどのようにかかわっていけばよいのか、戸惑い、悩むこともありました。言葉かけや情報の提示の仕方など、自分の支援の方法がその児童とあっていないとかえって混乱させてしまうということを実感しました。しかし2週間の教育実習の中で、支援する側は児童が納得して次の行動に移れるようにする「きっかけ」をつくることが大切であるということがわかりました。その「きっかけ」はカードの提示だったり、言葉かけだったり児童によって様々でした。児童の気持ちに寄り添いつつ、「次の時間はこんな楽しいことが待っているよ」といった次の行動に移れるきっかけをつくり、児童を見守り待つことが大切なのであると感じました。

研究授業では算数科の「仲間を集める」という授業を行いました。概念の学習は国語で勉強すると思っていましたが、指導要領や実習校で使用していた教科書や指導書を確認したところ概念を学ぶのは算数科である事を知りました。指導要領には算数科の第一段階のところに、ものどもの対応させることや概念などの指導内容が記載されていました。概念などの生活の基盤となることは一般の小学校では指導しないので、何を目的にやるのかを知るためにも指導要領の確認は改めて重要なことだと感じました。

そして、全体を見て授業を進めながら個人個人に支援や配慮を行うことはとても難しいと感じました。教えることは生活の基盤となるもので、どんなことを見据えて何を伝えたいのかという狙いや願いを明確にすることがとても大変でした。また教材なども児童の実態を考えながら試行錯誤しながら取り組み、実態把握や授業の時の支援に活かすためにも、児童とのかかわりは大変重要だと改めて痛感しました。

2週間の実習を通して、小学校の実習とはまた違った難しさがあり、実践授業や児童とのかかわり方など、これまで学んできた知識や経験してきたことを活かそうと思っても上手くいかず、落ち込むこともたくさんありました。しかし大変だった分、学びも多く充実した教育実習でした。また、先生方には研究会でもご指導いただき、自分の課題点を新たに発見することができました。この2週間の貴重な経験や素敵な出会いを糧に、日々精進していきたいと思えます。